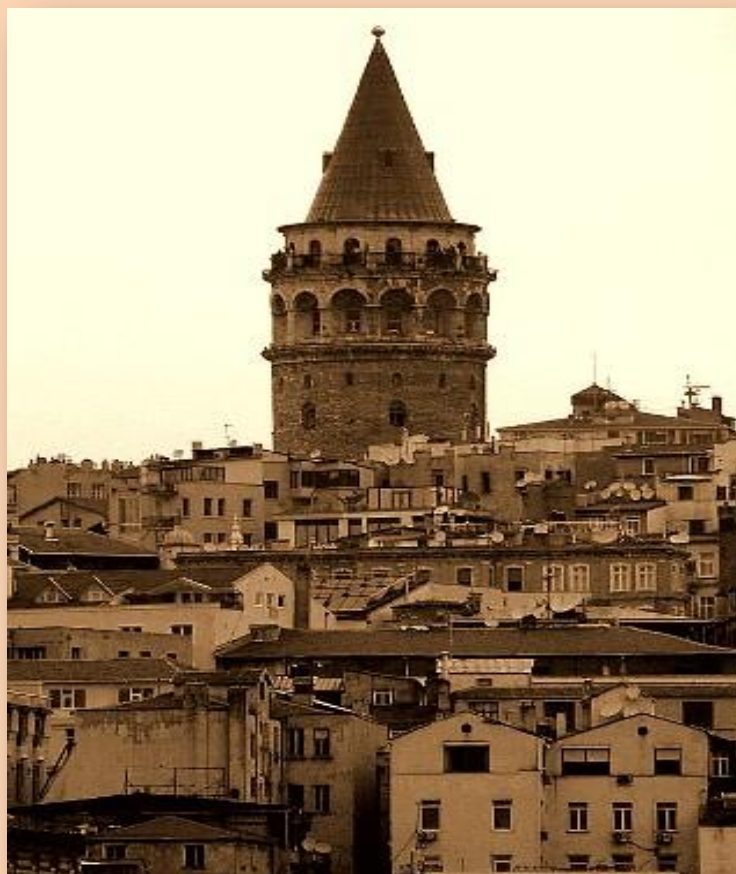


# İSTANBUL'DAN MERHABA!

(イスタンブールより“メルハバ”=こんにちは！)



## みらい

国際復興壁新聞 イスタンブール号



イスタンブールはアジアとヨーロッパの2つの大陸にまたがっています。かつてはローマ帝国・ビザンチン帝国・オスマン帝国の首都でした。「東西文明の十字路」と呼ばれたイスタンブールは過去と現在の融合する不思議な都市です。



春になると咲き乱れるチューリップ。原産地はトルコです。



イスタンブールは2020年夏季オリンピック開催国に立候補しています。



トルコ共和国建国の父  
アタトゥルク

## イスタンブールってどんなところ？



ドネル・ケバブ



海に映えるブルーモスク



ボスフォラス海峡沿いでのチャイは最高のひととき



近年高層ビル建築がさかんな市内



アジアとヨーロッパを繋ぐ大橋



歴代のスルタンが収集した宝飾品コレクションが見もののトプカプ宮殿



ビザンチン建築最高傑作アヤソフィア



4000軒の店が連なるグランバザール



観光客に人気のサバ・サンド





# ぼくの・わたしの未来

20年後は何やってるかな？

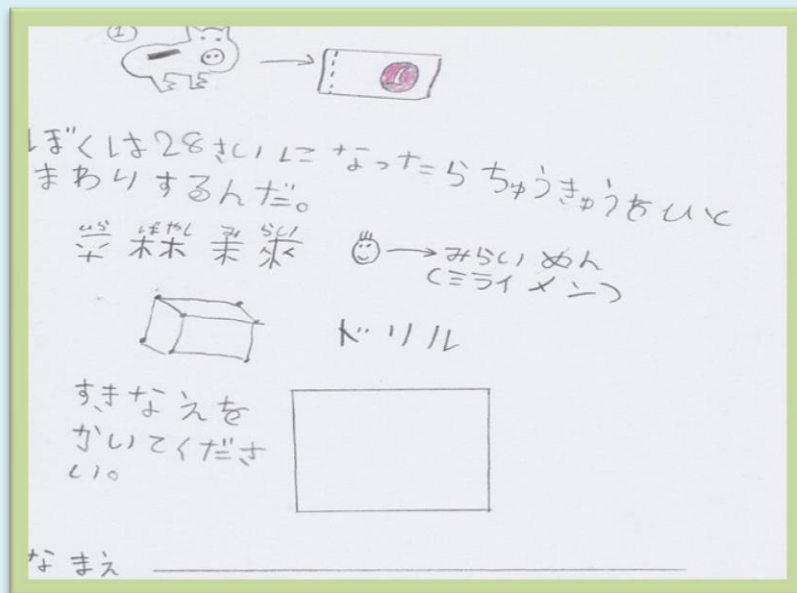


飛琉(ひらる)ちゃん 6歳

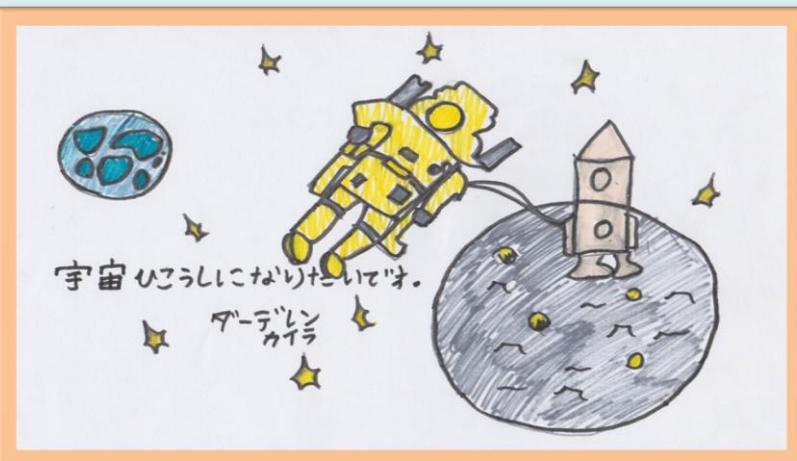


めるとくん 8歳

May all your dreams come true!



未来(みらい)くん 8歳



カイラくん 12歳



あすやちゃん 13歳

## 日本語って ムツかしい！？

普段はトルコの現地校に通う子供達。週末は補習校で日本語を勉強しています。遠い異国の地、イスタンブールで一生懸命日本語の習得に励んでいます、ときにはこんなほほ笑ましいことも。

授業で「里いも」のことをある友達が「くろ(黒)いも」と読んだので皆で大笑いした。実は他の皆は「じゃがいも」だと思っていたらしい。里いも、トルコにはないので知らないのです。

学校から帰ってきて、「お母さん、今日はお友達4ひきと遊んだんだよ！」  
1羽、2個、3本、4枚、5人…  
ムツかしいですね。

「オカッパとは〇〇先生の頭のことだよ。」との先生の説明に「〇〇先生は河童だったの！？」と真顔で聞く生徒達…。

「こうなったのも全部お母さんのせいだよ(怒)！」と言うところを「お母さんのおかげだよ！」と言うので迫力がでない…。

耳の遠い祖母と会話した後、「おばあちゃんがまたとんてんかんな事言ってるよ。」  
…とんちんかんではないだろうか？

「おかえり。」と言うといつでも「おかえり。」と返事が…。

「高い」の反対を書きなさいという問いに「高くない」、「長い」の反対に「長くない」と書いてあった。

## みらい・Miray・未来

トルコにはMiray(ミライ)という人名があります。男の子にも女の子にもつけられる名前です。

Ay(アイ)はトルコ語で“月”を意味します。元来は「月の初めの日々」というMirayの名前の意味は「月のように光り輝く者」。

日本語にも似たその響き、そのまま日本名としても使えることから、ペルシャ語が由来のこのすてきな名前をもったMirayくん、Mirayちゃんがトルコにはたくさんいます。





# 合気道



い  
ん  
い  
s  
t  
a  
n  
b  
u  
し

うちには小学3年生になるトルコと日本のハーフの息子がいます。放課後何かスポーツをさせたいと思っていたのですが週中にやってるものがなかなか見つかりませんでした。ある日友人から近所に合気道を教えている道場があると教えてもらい連絡したところ、体験レッスンに参加できますよとのこと。早速息子の友人も誘って行くと、私も驚くほど合気道が気に入ったようです。レッスン中日本式にお辞儀をしたり、「よろしくお願ひします。」「ありがとうございます。」「1, 2, 3、」等、トルコの子供達も日本語を使ったりしているのが新鮮に感じたのでしょうか。体験レッスンの後、「日本人でよかった！」と興奮気味に話していました。今は合気道を始めて1ヵ月半ですが、もうすぐテストがあると楽しみにしています。合格すると白帯から黄帯になります。

トルコで合気道が始まってから今年でちょうど30年目です。1983年に駐在員として来られていた熊谷御夫妻が教え始められたのがきっかけで徐々に広まっていき、1989年に御夫妻が日本に帰国されても交流は続き、またトルコ人のお弟子さん方が後を継いで教えたおかげで、今はトルコの主要な都市には必ず合気道を教えている道場があり、合気道人口もトルコ全土で3千人以上にもなるそうです。

息子達の後には大人の人達のレッスンが始まるのですが、女性の方もたくさんおられ皆さん大変熱心に頑張つてつらっしゃいます。トルコに住んでいてこのように日本の文化に興味を持ってくださっているのを見ると日本人として感慨深いものがあります。息子のクラスにもブルガリア人の女の子やロシア人の男の子もいて小さな道場が素晴らしい国際交流の場となっていて、合気道を習わせて良かったと思います。

(写真、文・川西 裕子さん)



めざせ 黒帯!



レッスン風景



皆、真剣です。



ワークショップでの作品

# 折り紙



## トルコの折り紙

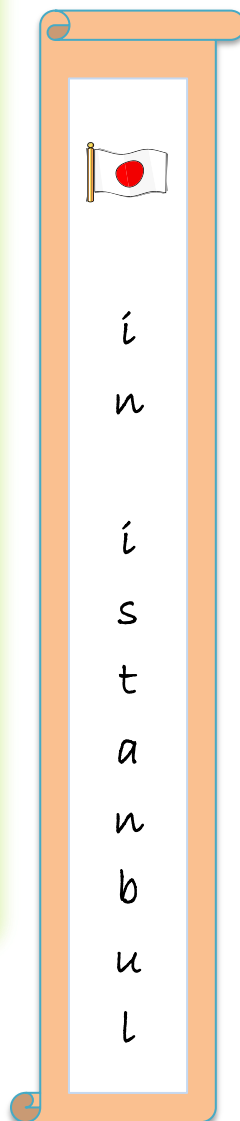
折り紙が国際用語になって久しく、トルコでも名前だけは知られるようになりました。しかしながら実際どういうものか知る人は少なく、その芸術性はまだよく理解されていません。

私は折り紙が子供から大人まで楽しめるものだということを広めるために、小学校で折り紙を教えたり、大人向けにワークショップを開催しています。小学校に付属の幼稚園児にも教えていますが、何回授業をやってもまだ普通に角を合わせることもできない子がほとんどで、日本との違いを痛感させられています。それでも回を重ねていくと、ひとりふたりはできるようになる子が現れます。4年生くらいになると、初めてでもクラスの半分くらいの子が難易度2くらいのものをすぐに折れます。数回やればツルのように難易度3のものを折れる子も中には出てきます。

しかしこの難易度3は、四角からひし形に折り広げるテクニックがあるために、大人でも半分くらいの方が理解できません。先日イスタンブルの名門大学イスタンブール工科大にワークショップに行きましたが、ツルをすぐに出来たのは1割しかいませんでした。それが希望者だけが参加するワークショップでは、けっこうみなさん折れるようになります。手芸などをやっていて折り紙に興味がある人が参加することが多いので、もともとが器用なのですね。それに裁縫などやっている人はある程度出来上がりを想像できるようです。この前などは4枚合わせて作る箱をやったら、非常に喜ばれました。

トルコでは子供の教育に役立つと考えられている折り紙ですが、大人でも楽しめる立派な芸術だということを、これからも広めて行きたいと考えています。

(写真、文・安達 智英子さん)



幼稚園での授業風景



小学生クラスの作品





## トルコの魔除け

「すごくかわいい赤ちゃんね！」「食べちゃいたいくらいかわいい！」「見てこの脚、まるまる太って、すっごくかわいい。」赤ちゃん大好き度の高いトルコ国民、赤ちゃんを見ると黙ってられないのです。休日にベビーカーで赤ちゃんを散歩させたりすると、見知らぬ人達がたくさん寄ってきて抱きかかえたり、キスしたりとかわいい赤ちゃんはもみくちゃにされます。わが子をほめちぎられたのに、外出先から帰ってきたお母さんやお父さんはちょっと心配顔。

トルコではほめられ過ぎると、悪いことが起こると信じられているのです。そのため、新生児には産着にガラスでできた厄除けの目玉をつけます。ほめられ過ぎて災いとその身にふりかかるのを防ぐためです。又、嫉妬も災いを招くと信じられています。新生児だけではなく、若い女性もナザール・ボンジュックでできたアクセサリーを身につけたりします。年配の女性でもつけている人はいるのですが、頻度でいったら若い女性の方が圧倒的に多いです。美しさだけでなく若さにも嫉妬する人は多いということでしょうか。新車を購入したとか、家を買ったなど、羨望の的になりそうな時は、この厄除けのお守りを玄関や壁やミラーにつるしたりします。

このお守りは「ナザール・ボンジュック」と呼ばれトルコに来る観光客のおみやげ品として重宝されています。ナザールは古い言葉で、目とか見方という意味。又、ボンジュックとはガラス玉のこと。世界を見る窓が目であり、人間の目は良くも悪くも、全ての考えが最初に現れる器官であるとみなされています。又、青い色には悪いものを吸収する力があると信じられていたことより、昔からナザール・ボンジュックには青い色のガラス玉が使われてきました。ナザール・ボンジュック信仰は、イスラム教が伝わる以前からトルコに伝わるものだそうです。現在では、厄除け信仰、慣習、又は単なる飾りとして使われていて、トルコの至るところでこのナザール・ボンジュックを見ることができます。トルコの人々は、ナザール・ボンジュックの他、近くにある木製のもの、例えばテーブルを拳骨で軽くたたいたり、自分の両方の耳を指でつまんで厄除けとしています。ボディランゲージの多いトルコならではの厄除け方法です。

(写真、文・大矢 ちはるさん)



女性用アクセサリー

ガラス製のナザール・ボンジュック

お土産屋さんにも売っています。



## TURKISH COFFEEでひとやすみ

トルココーヒーはチャイ(紅茶)と並んでトルコでは食後に、ちょっと一息、お客のおもてなしに、といつでも登場する飲み物です。



Cezve(ジェズヴェ)と呼ばれる小さな柄杓にカップ同量の水・トルココーヒー小さじ3杯・砂糖小さじ2杯を入れて弱火でスプーンでかき混ぜます。



敬虔なイスラム教徒の中にはアラールの神のみが知る未来を占うことに眉をひそめる人もいますが、女性が集まると誰かしら占いが得意な人がいて飲んだ後はカップを逆さにして冷めるのを待ちます。魚=いいことがある、鳥=何か知らせがある、大きな塊=大金、etc コーヒーの粉が生み出すさまざまな模様を見ながら未来を占います。



カップに注ぐときは細かい泡を消さないようにそっと注ぎます。泡がたくさん立つほど美味しいとされています。そして上澄みだけを飲みます。



### ● あとがき ●

「随分と埃っぽい町です。」着いてすぐ家族に宛てた手紙の冒頭はこうだったと記憶しています。メトロも路面電車もなく、信号もようやくつき始め、ろくに舗装していない道路もあり、ドアの壊れたバスがもうもうと埃を舞い上げて走っている、そういう場所でした。断水、停電は日常茶飯事で冬になると質の悪い石炭を燃やす為真っ白に霧がたちこめたようになり息もできなかったイスタンブール。

あれから早いもので20年、イスタンブールは劇的に変化しました。生活が便利になった反面、物価は高騰し、次々と高層ビルが立ち並び、大型ショッピングセンターにはブランド品が溢れかえり、道行く人たちも垢抜けました。喧騒の合間に聞こえるエザン(お祈りの声)に、そういえばイスラム圏に住んでいたんだっけと時々思い返すくらいに西欧化が進みました。

歴史的遺産の多い、地理的にも恵まれたこのイスタンブールで風光明媚な場所は多々ありますが、何故かガラタ塔が見える風景が私は好きです。ビザンチン帝国時代528年という気の遠くなるような昔から様々な変遷を経てこのイスタンブールを見守ってきたガラタ塔、これから先もずっとずっとこの都市の未来を、変貌する様子を見続けていくことでしょう。

夜のオレンジ色の街灯の下、タクシム広場で天体望遠鏡(というほど大きくない)を前にちんまり座っていたおじさん、一体何をしているのかと思ったら満月を望遠鏡で覗かせて小銭を稼いでいるのでした。時折ぼんやりと思い出す20年前のこの光景に素朴なイスタンブールの日々を懐かしんでいる私があります。願わくは暖かい国民性だけはずっと変わらないでいてほしいと思う今日この頃です。

お忙しい中御協力いただいたイスタンブール在住の皆様はこの場をお借りして御礼させていただきます。そして遥か遠いイスタンブールより釜石市の皆様の御健康と一日も早い御復興を心よりお祈り申し上げます。

(編集 町田・ダーデレン なんみ)

